

伝統文化と科学・学術の新たな出会い

第一部：シンポジウム

※平成 30 年 12 月 6 日更新

主催者挨拶

山極 壽一（日本学術会議会長・京都大学総長）

実行委員長挨拶

山田 啓二（前京都府知事・京都産業大学学長補佐・法学部教授）

略歴・プロフィール



2018 年 4 月、京都産業大学法学部（法政策学科）教授に就任、学長補佐の職務を務める。文部科学省の中央教育審議会委員、京都府参与、京都文化博物館長を務める。

1954 年 兵庫県洲本市生まれ。1977 年 東京大学法学部卒業。前京都府知事、前全国知事会会長。モットーは「人生に無駄になることなんか何もない」ピンチでもプラス思考は忘れない。座右の銘は「一期一会」。

「伝統芸術と科学」（対談）

AI 時代における人間の役割について、芸術と科学が向き合うとどんな論点が出てくるのか、対談形式で討論します。科学において重要な役割を果たしてきた合理主義は、これから解決が求められる複雑な問題に対して、その限界が明らかになりつつあります。合理的に解決できる問題に対しては、AI が期待されています。身体性を含めた人間性を重視する芸術が、複雑な問題解決において、私たちが見落としていたヒントを与えてくれるのではないのでしょうか。

登壇者

山極 壽一（日本学術会議会長・京都大学総長）



1952 年東京生まれ。京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。

理学博士。ルワンダ共和国カリソケ研究センター客員研究員、日本モンキーセンター研究員、京都大学霊長類研究所助手、京都大学大学院理学研究科助教授、同教授、同研究科長・理学部長を経て、2014 年より第 26 代京都大学総長。現在、日本学術会議会長、国立大学協会会長、環境省中央環境審議会委員、総合科学技術・イノベーション会議議員も務める。

土佐 尚子（京都大学大学院総合生存学館特定教授）



アーティスト兼研究者。工学博士（東京大学）。米国マサチューセッツ工科大学建築学部 Center for Advanced Visual Studies アーティストフェローを経て現職。研究テーマは、先端技術で日本文化を扱うカルチュラル・コンピューティングの領域を開拓、研究と作品制作を行う。20 代に制作したビデオアート作品がニューヨーク近代美術館にコレクションされた。2016 年度文化庁文化交流使。

「アジア化する世界～21世紀の潮流～」(単独講演)

碁や将棋のプロ棋士に勝つAIのように、近い将来AIが人間の知的活動を凌駕する可能性が議論されています。しかしその根底には、論理的な思考を人間の知的活動の根源とする西欧の哲学があり、21世紀もそれが社会の指導原理になると考えられてきました。しかし最近、トランプ米国大統領の言動に代表されるように、人々の思考・行為が感覚的・感情的になってきているようです。人間は論理的な思考を超えた複雑なものなのではないでしょうか。現実の社会で何が起こりつつあるのかという観点から21世紀はどのような時代かを考えてみます。

登壇者

中津 良平 (京都大学デザイン学リーディング大学院特命教授)



1946年生まれ。1971年京都大学大学院修士課程修了後、日本電信電話公社(現NTT)入社。1991年基礎研究所情報科学研究部部長、1994年ATR知能映像通信研究所所長、2002年関西学院大学情報科学科教授。2008年シンガポール国立大学教授などを経て2015年より現職、工学博士。他に(株)NTアソシエイツ代表取締役社長を兼任。IEEE ライフフェロー、電子情報通信学会フェロー。

「いけばな～日本の知恵の世界発信～」(対談)

日本の伝統的ないけばなは、西洋のフラワーアレンジメントとは異なり、花や枝を左右非対称(アンバランス)に生ける特徴があり、余白の美や枯れていく美しさまでも表現します。これは自然と正面から向き合う姿から来るもので、想定外の事実を受け止めそこから新たな価値を見いだすという科学と通じる部分が多々あります。このような価値を生み出した文化的背景を探ることにより、日本文化が世界に貢献できる可能性を探ります。

登壇者

池坊 専好 (華道家元池坊 次期家元)



小野妹子を道祖として仰ぎ、室町時代にその理念を確立させた華道家元池坊の次期家元。京都にある紫雲山頂法寺(六角堂)の副住職。いのちをいかすという池坊いけばなの精神に基づく多彩な活動を展開。2012年より、諸災害の慰霊復興や人々の幸せや平和を願い、西国三十三所の各寺院を巡礼、献華を行い2016年5月に結願した。2013年にはハーバード大学においてワークショップを、またニューヨーク国連本部において世界平和を祈念し献花を行った。現在は、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会文化・教育委員会委員を務める。アイスランド共和国名誉領事。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科博士後期課程修了。

渡辺 美代子 (日本学術会議副会長・科学技術振興機構副理事)



東芝総合研究所研究員、半導体の研究開発を担当、理学博士。カナダダルハウジー大学ポストドク、英国バーミンガム大学研究員、東芝研究開発センター材料応用技術センター長、同研究開発センター技術管理部門長、東芝イノベーション推進本部経営変革統括責任者を経て、2014年より現職。このほか、日本学術会議第24期副会長、内閣府男女共同参画会議に於ける専門委員などを兼任。

第二部：分科会

分科会 1. 京都市民にとっての科学・学術

やんわりしていて新しがり屋、好奇心の強い京都。ここに市民の力で作った初の医学校ができ、日本初のノーベル賞をとった湯川先生が初の共同利用研究所を作った、今年の物理ノーベル賞は異分野の成果をつないで新しいものを作ったこと、知っていますか？こんな町で、子供たちが実験教室を大学生や大学院生に教えてもらい、子供を持ったお母さんたちが市民と仲良く、科学について議論しおしゃべりの会をもっている。そんな経験を交換し合います。あなたも何かやってみたくありませんか？イノベーションを起こしてみませんか？

登壇者

コーディネーター：坂東 昌子（NPO 法人知的人材ネットワーク・あいんしゅたいん理事長）



1937 年生まれ、小学校 6 年で湯川ニュースを知った 1 人で、京大理学部に。大学院は湯川研究室、同研究室の助手・講師を経て、愛知大学教授、専門は素粒子論・非線形物理であるが、環境問題や科学教育、特に 3・11 後は放射線リスク研究に取り組む。女性研究者や若手研究者の支援に取り組み、2007 年日本物理学会長、同キャリア支援センター初代センター長。愛知大学定年退職後、NPO 法人知的人材ネットワークを立ち上げ、ポストドクター問題の改善、研究者間の更なる連携を目指して活動。

パネリスト：藤田 哲也（公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センターシニアフェロー）



1931 年生まれ、1955 年京都府立医科大学医学部医学科卒業後、米国 Purdue University Assistant Professor、京都府立医科大学教授（病理学教室）、米国カリフォルニア大学サンディエゴ医学部 Full Professor 兼任、1988 年京都府立医科大学学長を経て、1995 年（財）京都パストゥール研究所（現（公財）ルイ・パストゥール医学研究センター）所長に就任。1979 年朝日賞受賞、1991 年島津賞、1996 年紫綬褒章受章（病理学功労）など。中枢神経系や癌の発生学、病理学の指導的研究者。更に京都での医学校の歴史研究などにも広い視野で今なお研究を進めている。現在は（公財）ルイ・パストゥール医学研究センターシニアフェロー。

パネリスト：佐藤 文隆（京都大学名誉教授、NPO 法人知的人材ネットワーク・あいんしゅたいん会長）



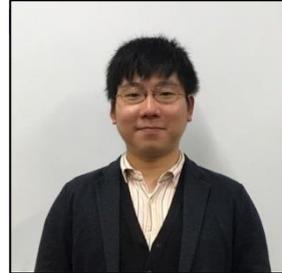
1938 年生まれ、小学校 6 年の時、湯川ノーベル賞ニュースの影響で京大理学部に。大学院は林忠四郎教授の天体核物理研究室、同研究室の助手助教授を経て教授、京大基礎物理学研究所所長、京大名誉教授。理論物理学なんでもこいで、特に相対論的宇宙論などで活躍、日本学術会議物理学研究連絡委員会委員長、京大理学部長・日本学術会議会員（2000 年～2003 年）、日本物理学会会長（1999 年）等歴任。300 を超える著書がある。1973 年、アインシュタイン方程式の佐藤・富松解で仁科記念賞・1989 年紫綬褒章など。

パネリスト： 鈴木 和代（京都大学医学部附属病院先制医療・生活習慣病研究センター
特定助教(糖尿病・内分泌・栄養内科)）



1978 年生まれ、岐阜大学医学部卒、日本糖尿病学会専門医・指導医。京都大学大学院医学研究科糖尿病・内分泌・栄養内科学講座にて博士（医）を取得し、同研究室にて日本学術振興会 JSPS 特別研究員 RPD を経て（期間中に欧州研究会議との協力による特別研究員の海外渡航支援事業派遣にてフランス留学）、現在は京都大学医学部附属病院先制医療・生活習慣病研究センター特定助教。専門は代謝および内分泌学関連だが、女性研究者仲間と子育てや研究との両立について語り合うにわとりランチ会@NPO あいんしゅたいん参加をきっかけに、JSPS「多様性をイノベーションに繋ぐ要因の研究と新たな評価法の提案」に関する研究開発専門委員会委員長としても活動している。

パネリスト： 草場 哲（京都大学理学研究科物理学・宇宙物理学専攻博士課程 3 年）



1991 年生まれ、2014 年京都大学理学部卒、2016 年同大学院理学研究科修士課程修了、現在、博士後期課程 3 回生。物理学、特に光物性物理学を専攻し、大学院では原子層薄膜の分光学的研究を行っている。また学部時代より、学業の傍ら、実験教室や科学ライティングなどの科学コミュニケーション・科学教育活動にも参加してきている。

パネリスト： 中川 寛司（京都大学理学研究科生物科学専攻修士課程 2 年）



高校生の頃、理科（生物）は暗記する対象でしかなくて、特に好きではなかった。しかし大学で学問の広さと深さに触れ、自身も研究に携わるうちに、興味を膨らませて学んでいくことの面白さを知った。いわゆる暗記の勉強には無い魅力を伝えたいと思い科学教育に関心を持った。NPO 法人あいんしゅたいんには学部四年生の頃から関わり始め、親子理科実験教室、おもしろ算数塾といった企画のアシスタント、神戸市科学館への出張授業に携わってきた。

パネリスト： 天羽 悠月（神戸市立平野中学校 2 年）



私は NPO 法人あいんしゅたいんに、小学四年生から参加しています。当時の私は好奇心の塊で、あらゆるものに疑問を持っていました。それらを真剣に受けとめ指導して下さった A T の大学生、大学院生の皆さん、そして先生方によって、私の科学の目は芽生え始めています。今までの体験を基に、これからも学び成長していきたいと思っていますので、どうぞ宜しくお願い致します。

分科会2. 伝統文化と科学・技術・リベラルアーツ

このセッションでは京都の主菓子（おもがし）を題材に、伝統文化と科学、学術の関係を考えてみようと思います。職人さんが自らが作る和菓子を通じてメッセージを伝えるには、自然に対する深い洞察と技、芸術のセンスが必要です。そしてその菓子をいただく側にもそれに応じた幅広い生きた教養ーリベラルアーツが必要です。教養がないと伝統文化は味わえないのではないかと。和菓子の職人さんが作る舞台を前にしつつ、研究者たるわたしと、伝統文化の「通事」たる濱崎加奈子さんとが、伝統と最新技術のマリアージュに向けて、縦横無尽に議論を交わします。

登壇者

コーディネーター：佐藤 洋一郎（京都府立大学京都和食文化研究センター特任教授）



京都府立大学・和食文化研究センター特任教授。京都大学農学部卒。同大学院博士前期課程修了。農学博士。国立遺伝学研究所研究員、静岡大学助教授、総合地球環境学研究所教授、副所長、人間文化研究機構理事などを歴任。イネの起源、農耕と環境の関係史などの研究をつづけ、最近では食文化に関して多角的な発信を続けている。『イネの人類史』『DNA が語る稲作文明』などの著書の他、NatureGenetics などにも多数の論文を発表。趣味は料理で、Eテレでグッチ裕三さんとの共演も。

パネリスト：濱崎 加奈子（公益財団法人有斐斎弘道館代表理事）



京都大学文学部（美学美術史学）卒、東京大学大学院（総合文化研究科）博士課程修了、学術博士。伝統文化プロデューサーとして、学術とアートの融合により、伝統文化の知と美を掘り起こし、各地で行事や場の再生を手がける。江戸時代の学問所址「有斐斎弘道館」を現代の学問所として再生させ館長に。菓子文化研究者でもあり京菓子公募展などを展開。専修大学准教授。北野天満宮和歌選者。著書に『香道の美学』、共著に『京菓子と琳派』『平成のちゃかぼん』他。

分科会 3. 先端産業と科学・学術

明治維新以降、わが国は西欧近代の科学技術を受け入れ、伝統工芸分野の技術を融合活用しつつ、日本流に変容させることにより、世界が認知する「ものづくり」大国に成長しました。しかし 21 世紀も第一四半世紀の終盤に近づき、科学技術と産業構造の変化が加速する今日、「ものづくり」技術の新展開が求められています。本分科会では、京都を代表するものづくり企業のトップと大学で科学技術の基礎研究ならびに人材育成に当たって来られた先生をお招きし、近未来社会における先端産業に対する科学・学術の在り方を展望します。

登壇者

コーディネーター：西本 清一（公益財団法人京都高度技術研究所理事長・地方独立行政法人京都市産業技術研究所理事長・京都大学名誉教授）



1975 年京都大学大学院工学研究科高分子化学専攻博士課程修了、78 年京都大学工学博士。京都大学助手、助教授を経て、93 年同教授。2006-07 年京都大学大学院工学研究科長・工学部長。06-09 年先端融合領域イノベーション創出拠点事業最高執行責任者、07-11 年グローバルリーダーシップ工学教育プログラム総括。12 年京都大学を定年退職後、(地独)京都市産業技術研究所と(公財)京都高度技術研究所の理事長を兼務。14 年より科学技術振興機構産学連携展開部先端計測グループ開発総括を兼任。08-13 年知的クラスター創生事業研究統括、13-18 年スーパークラスタープログラム代表研究統括を通じて、京都地域の産学公連携による科学技術振興に貢献。

パネリスト：柿野 欽吾（学校法人京都産業大学理事長）



1942 年京都市生まれ。同志社大学経済学部卒業・大学院経済学研究科修士課程修了。1984 年 京都産業大学経済学部就任、教務部長・経済学部長・大学院長を経て 2011 年から学校法人京都産業大学理事長に。子供時代から西陣織業者に接する機会が多く、同志社大学大学院以降は毎回「西陣機業調査」に参画するなど、長年にわたり西陣機業研究に携わる。現在、京都市産業技術研究所評価委員長や京都信用保証協会外部評価委員、京都産業会館理事、京都伝統産業ふれあい館評議員、西陣織工業組合学識顧問、賀茂別雷(上賀茂)神社責任役員なども務める。

パネリスト：辻 理（サムコ株式会社代表取締役会長兼 CEO）



1942 年京都市生まれ。立命館大学理工学部卒業。分析機器メーカー勤務と同時に京都大学にて有機微量分析の機器化に関する研究に従事。76 年米国 NASA Ames 研究所研究員。低温プラズマによる固体表面反応に関する研究。79 年サムコインターナショナル研究所(現 サムコ株式会社)設立、代表取締役社長に就任。2001 年日本証券業協会店頭市場に上場。14 年東京証券取引所市場第一部に上場。18 年サムコ株式会社 代表取締役会長。(一財)サムコ科学技術振興財団 理事長。

パネリスト： 林 善夫（科学技術振興機構開発主監（産学連携）・未来社会創造事業（大規模プロジェクト型）運営統括・元旭化成株式会社取締役・新事業本部長）



1970年京都大学工学部高分子化学科卒業、72年同大学院工学研究科修士課程修了。92年千葉大学博士(工学)。2006-07年 京都大学大学院エネルギー科学研究科非常勤講師、産学連携セミナー「知財実務/MOT コース」を担当。1972年旭化成株式会社入社、高機能製品の探索・基礎研究、応用研究に従事。2005年同社執行役員、知的財産・研究基盤部長、08年同社取締役、新事業本部長を経て、10年科学技術振興機構開発主監、現在に至る。

パネリスト： 原 良憲（京都大学経営管理大学院院長・教授）



1981年東京大学工学部電子工学科卒業、83年同大学院工学系研究科修士課程修了。同年日本電気株式会社入社以来、日米の研究拠点にて、Web・メディア情報管理などの研究・事業開発に従事。2005年京都大学博士(情報学)。06年京都大学経営管理大学院教授、18年4月より京都大学経営管理大学院院長。イノベーション・マネジメント、サービス・イノベーションに関する教育研究に従事。サービス学会副会長、京都市ベンチャー企業目利き委員会審査委員、京都市「これからの1000年を紡ぐ企業認定」審査委員長などを務める。著書に『日本型クリエイティブ・サービスの時代ー「おもてなし」への科学的接近』（共著）日本評論社(2014年)など。

パネリスト： 堀場 厚（株式会社堀場製作所代表取締役会長兼グループ CEO）



1971年(株)堀場製作所の米国JV オルソン・ホリバ社に入社。75年カリフォルニア大学アーバイン校工学部電気工学科卒業、77年同大学大学院電子工学科修士課程修了後、堀場製作所に帰任、92年代表取締役社長、2005年より代表取締役会長兼務。社長就任時の年間売上高約400億円を、売上高2,000億円、営業利益300億円、世界27か国48拠点を展開。従業員7,500名中60%が外国人を占めるグローバル企業に成長させ、18年より代表取締役会長兼グループCEO。(一社)日本電気計測機器工業会会長、(一社)日本分析機器工業会会長、京都商工会議所副会頭などを歴任し、産業界や地元経済の活性化に貢献。産業構造審議会・製造産業分科会などの政府諮問機関委員も務める。フランス共和国の科学技術と産業発展への貢献により1998年国家功労章オフィシエ、2010年レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエを受章。15年同国モンペリエ大学より名誉博士号を授与される。

パネリスト： 松波 弘之（京都大学名誉教授・元科学技術振興機構イノベーションプラザ京都館長）



1964年京大工学研究科電子工学専攻修士課程修了後、助手、70年京都大学工学博士、71年助教授を経て83年京都大学教授。76-77年米国ノースカロライナ客員准教授。2003年京都大学を定年退職後、04-12年（独法）科学技術振興機構イノベーションプラザ京都館長、13年同産学官連携アドバイザー。半導体材料として炭化珪素(SiC)の重要性を1960年代後半から正しく認識し、今日に至るまで一貫してSiCの材料・デバイス開発研究を展開。低炭素社会実現を目指し、常に世界を先導しつつ、SiCパワーデバイスの実用化と社会実装の加速化に尽力し、世界で最も期待される半導体材料に育て上げた。その功績により、01年山崎貞一賞、02年文科大臣賞(研究功績賞)、13年朝日賞、16年米国電気電子学会 David Sarnoff Award、17年本田賞ほかを受賞。

分科会 4. 若手研究者は科学・学術について何を考えているのか

日本学術会議若手アカデミーは、日本学術会議の中で45歳未満の若手研究者の学際的な集合体です。若手研究者を取り巻く世界の現実には、苦悩も葛藤もあります。それと同時に、若手ならではの希望、遠望、そして野望もあります。ファシリテーターの乗竹亮治氏が会場からPCやスマートフォンで投げかけられる質問、疑問を用いてざっくばらんに若手アカデミーを紐解き、若手研究者のキャリア開発や若手の考える学術の未来について、本音で語る場を提供します。

登壇者

コーディネーター: 新福 洋子 (日本学術会議特任連携会員・京都大学大学院医学研究科准教授)



聖路加看護大学(当時)を卒業、助産師として臨床後にイリノイ大学シカゴ校大学院看護学研究科を修了(博士)。世界保健機関東南アジア地域事務局インターン、聖路加国際大学助教を経て、2018年より現職。アフリカの母子保健向上のための助産ケアの改善をテーマに研究している。2012年第一回「明日の象徴」看護・保健部門受賞。2014年、15年秋篠宮紀子妃殿下ご進講。2017年日本学術会議若手アカデミー23期会員、同24期副代表、国際分科会委員長。2018年Global Young Academy執行役員に選出。

コーディネーター: 西嶋 一欽 (日本学術会議連携会員・京都大学防災研究所准教授)



京都大学防災研究所准教授、日本学術会議連携会員。2009年スイス連邦工科大学チューリヒ校博士(Doctor of Sciences)取得。スイス連邦工科大学チューリヒ校上級研究員、デンマーク工科大学准教授を経て、2013年9月より現職。専門は自然災害リスク評価、信頼性工学、風工学など。日本風工学会研究奨励賞受賞、International Associations for Wind Engineering Junior Award受賞。日本風工学会事務局長、ISO TC98分科会委員等。

ファシリテーター: 乗竹 亮治 (日本医療政策機構理事・事務局長)



エンジニアリングやデザインをはじめとした異なる専門領域のステークホルダーを結集し、医療健康課題に対処するプロジェクトに各国で従事。WHO(世界保健機関)'Expert Consultation on Impact Assessment as a tool for Multisectoral Action on Health'ワーキンググループメンバー(2012)。慶應義塾大学総合政策学部卒業、オランダ・アムステルダム大学医療人類学修士。米国医療支援NGO Project HOPEプロボノ・コンサルタント。政策研究大学院大学客員研究員。東京都「超高齢社会における東京のあり方懇談会」委員。

パネリスト： 岸村 顕広（日本学術会議連携会員・九州大学大学院工学研究院応用化学部門・九州大学分子システム科学センター准教授）



小学校の担任教師の影響で「目には見えないものを見てきたかのように語る」化学の魅力に取り憑かれ、現在に至る。ナノテクノロジーを専門としており、ナノスケールで作り込まれたツールを用いて難治疾患を治療することを目指す傍ら、日本学術界の抱える難病に切り込むべく若手アカデミーにて活動を行っており、来年 42 歳、現在絶賛厄年中である。

パネリスト： 岩崎 渉（日本学術会議連携会員・東京大学大学院理学系研究科准教授）



東京大学大学院理学系研究科准教授、日本学術会議若手アカデミー幹事。2009 年東京大学博士（科学）取得。東京大学大学院新領域創成科学研究科助教、東京大学大気海洋研究所講師を経て、2014 年 4 月より現職。専門分野はバイオインフォマティクス、ゲノム進化学、微生物生態学など。日本バイオインフォマティクス学会 Oxford Journals・JSBi Prize・日本進化学会研究奨励賞受賞、『広辞苑 第七版』（岩波書店）執筆・校閲。

パネリスト： 高瀬 堅吉（日本学術会議連携会員・自治医科大学大学院医学研究科教授）



専門は臨床発達心理学、発達生物心理学。横浜市立大学大学院医学研究科医科学専攻修了。東邦大学医学部医学科解剖学講座微細形態学分野の講師を経て、2014 年より現職。特定の発達段階において男性または女性のどちらか一方に多く顕在化する行動異常を研究し、介入方法の開発につながる基礎的知見の提供を目指している。また、心理学の学際性を高めるために他分野との共同研究を積極的に展開している。2017 年より日本学術会議若手アカデミー幹事。

パネリスト： 川口 慎介（日本学術会議特任連携会員・国立研究開発法人海洋研究開発機構研究員）



深海底で起こる地質—水—生物相互作用を研究するため、年間 2 ヶ月ほどを洋上で過ごしている（なおこれを書いている現在も茨城県沖で海山生態系の調査中である）。日本学術界のブラック労働環境を変革して明るい未来を描き出し世界平和を目指す 1982 年兵庫県生まれ、三児の父である。

パネリスト：伊藤 恵理（日本学術会議連携会員・国立研究開発法人海上・港湾・航空技術研究所電子航法研究所主幹研究員）



東京大学大学院博士課程修了（航空宇宙工学専攻）。ユーロコントロール実験研究所、オランダ航空宇宙研究所、NASA エイムズ研究所などでの研究歴を経て現職の国立研究開発法人海上・港湾・航空技術研究所 電子航法研究所 主幹研究員。

日本学術会議の連携会員や、国際航空科学会議（ICAS）の常任委員も務めながら、「空はひとつ」をモットーに、航空交通管理システムの研究開発にたずさわっている。

著書に『空の旅を科学する』（河出書房新社、2016年）、『みんなでつくるAI時代』（CCCメディアハウス、2018年）。中高・大学や企業等での講演も多数こなす。

パネリスト：谷口 洋幸（日本学術会議連携会員・金沢大学国際基幹教育院准教授）



専門は国際人権法、ジェンダー法学。中央大学大学院法学研究科公法専攻修了、博士（法学）。日本学術振興会特別研究員 PD（学習院大学）、早稲田大学比較法研究所助手、高岡法科大学准教授、同教授を経て現職。LGBT/性的マイノリティに関連する国際人権保障や各国の法政策に関する比較研究に従事。（公財）世界人権問題研究センター研究員、京都人権啓発推進会議・性的指向/性自認研究会座長。編著に『性的マイノリティ判例解説』（信山社・2011）、『セクシュアリティと法』（法律文化社・2017）など。

パネリスト：松中 学（日本学術会議連携会員・名古屋大学大学院法学研究科准教授）



大阪大学大学院法学研究科助教、新潟大学法学部准教授を経て、名古屋大学大学院法学研究科准教授（2010年4月より）。専門は会社法・商法。特に法や他の形態のルールが作られる過程を研究している。現職に就いてからやたらと海外に行く仕事を振られ、それはそれで良いかと思っている。

第三部：産学良縁創出企画

～あなたの得意は誰かの不得意。GIVE&TAKE でさくっと協働（コラボ）～

あなたの不得意は誰かの得意。この広い世の中、きっと解決してくれるコラボ相手がいるのではないのでしょうか！そして逆に、あなたの得意は誰かの不得意。あなたの知識や技術は、他分野の研究者や企業の方に役立てることができるかもしれません！

今回、このようなギブアンドテイクの関係を産学のあいだで生み出すべく、産学良縁創出企画を実施します！

やり方はシンプル。「私の関心」「今困っていること」「提供できる知識や技術」を計上するだけ。参画した方々のこの3つの質問を学会ポスター形式での展覧会を開き、期間中お立ち寄りいただき自由に閲覧&コメントを記載してコラボを生み出す企画です。

※事前にお申し込み頂いていなくても来場できます！

登壇者

進行： 宮野 公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター准教授）



専門は学問論、大学論、異分野融合（かつては金属組織学、ナノテクノロジー）。96年立命館大卒業後、カナダ McMaster 大学、立命館大、九州大学を経て2011年より現職。2011年4月～2014年9月まで総長学事補佐、2011年10月～2014年9月まで文部科学省学術調査官を兼任。現在、国際高等研究所客員研究員も兼任する他、日本触覚学会特別顧問。1997年南部陽一郎研究奨励賞、2008年日本金属学会若手論文賞、他多数。著書：研究を深める5つの問い（講談社ブルーバックス）他。共著：反大学改革論（ナカニシヤ出版）